

Newsletter

August 2009

<http://www.aack.or.jp>

目次

送別の辞 川喜田二郎さん	上田 豊……………1
ランタン・ゴサインクンド・ヘランブー トレッキング	(二〇〇九年四月二二日―五月九日)
お知らせ	福本昌弘……………1
事務局報告	……………8
会員動向	……………10
編集後記	……………11
総目次(1～50号)	……………1～IX

送別の辞

川喜田二郎さん

上田 豊

川喜田さんの訃報を知り、探検と登山の古き良き時代が流れ去りつつある寂寥感を覚えます。

京都北山の山並みで始められた川喜田さんの山登りは、京都一中から三高・京大へ進まれ、ヒマラヤへの夢をいだきながら白頭山、今西錦司さんらとのポナペ島、大興安嶺などの探検・調査に広がっていきました。京都が探検のルツボのようだったこ

の時代の話は、わたしたち後輩を魅惑し、パイオニア精神をかきたててくれました。

その後のネパール・ヒマラヤでの、組織に頼らないご活躍は、ヒマラヤの魅力に、氷雪の山だけではなく、人と文化など多彩で奥深い興味があつたことを、わたしたちに教えてくれました。さらに、現地への協力活動に尊い意味があることも気づかせてくれました。

文化人類学者としてのヒマラヤ探検のドキュメントはもちろん、ユニークな発想の著作の数々には大いに啓発されましたが、『ネパール・ヒマラヤ探検記録―ネパールと日本1899-1966』や朝日小事典『ヒマラヤ』など、人文地理学者としても情報をつちりと編著され、ヒマラヤをめざす者には座右の文献として貴重でした。

京都派探検家のすぐれた先輩たちは、それぞれの個性を持って活躍されました。そのなかでも川喜田さんの特徴は、純粹な熱い魂で突き進む若々しい青年の姿を持ち続けておられたことで、熱血漢ぶりがさわやかな敬愛する先達でした。また現地の人々への強い愛情にも、心服してきました。

今、御霊はいずこでしょうか。チベット二郎といわれた川喜田さんで

すから、チベットの天空を飛翔されているのでしょうか。

謹んで、ご冥福をお祈りします。

編集者より 次号にて川喜田二郎氏を偲んで山岳界における氏の業績や人物像について特集する予定です。

ランタン・ゴサインクンド・ヘランブー トレッキング

(二〇〇九年四月二二日―五月九日)

福本昌弘

メンバー…阪本公一(L)、谷口朗(SL)、八太幸行、福本昌弘
 サイダー…アムサン・シエルパ(三九歳)
 ポーター…チリング(三七歳)、ビル(二七歳)、ウルケン(二〇歳)

二〇〇一年に阪本君が友人夫妻と三人で、ランタン溪谷・ゴサインクンド・ヘランブーを訪れた時の、ラリーグラス(石楠花)、桜草等の咲き乱れる溪谷、聖地ゴサインクンド、ヘランブーの村々の興味深い話を、何度か彼から聞いていた。

ランタン谷なら、もう一度訪問してもよいと、彼が我々の為に、この

トレッキングを企画してくれ、訪れることになった。

一九四六年この地を訪れた英国探検家ティルマンが、世界で最も美しい谷と呼び、其の谷の最奥には、純白のウエディングドレスを纏ったように光輝いているフリーウテッド・ピーク（ガンチェンポ六三八七m）が仰ぎ見られる事、またAACK島田君達が、学生時代アンナプルナ南峰初登頂後、この谷に入りガンチェンポに挑戦している事も興味あることだった。

今回のトレッキングは、阪本君が飛行機の手配、現地との交渉、食糧計画と調達、装備等、綿密な計画を立て全て手作りで企画してくれた。

出発…二〇〇九年四月二一―二三日 関西空港で東京組、京都組落ち合せて、バンコク経由カトマンドウに入る。

四月一三―一五日、カトマンドウ泊。

この街に三日間滞在中、今回のトレッキング・エージェンツ（シーガル・トラベラーズ）への、トレッキング代金の支払い、買い物、シエルパとの顔合わせ等の用事を済ませた。

この時エージェンツ事務所に、昨年秋季のロールワリン・トレッキングで大変お世話になった大物サード、ナワン・ヨンデンさんが律儀に我々に挨拶にきてくれた。

一三日夜、アムサン・シエルパとナワン・ヨンデンさんを招待して、夕食を共にして歓談。

四月一五日 ランタン谷入り口のシャブルベシ―行きバスに乗るべく、新バス・ター

ミナルに六時三〇分に行くと、アムサン・シエルパが途方にくれた顔つきで、我々を待つており、彼の説明によると、途中の幹線道路が沿線の住民の政府への抗議で、閉鎖されて今日はバスが出ないとのこと。現政権は全く治安掌握しきれない模様。やむなくホテルに引き返し、午前中、古都パタンへ観光にでかけた。

四月一六日 五時起き、七時に新バス・ターミナルに到着。今日はバスが出るとのこと。現地住民の利用しているバスで、七時四〇分出発。シャブルベシ―に向う。バスは、あらかじめ座席指定券を購入してあったので座れたが超満員。通路は勿論の事、バスの屋上も超満員。二人の車掌が車内、車外を軽業のように行き来してバス代金を徴収するのは見事。

バスは乗り下り自由、最終地点のシャブルベシ―の一時間ほど手前の、ダウンチェエ入山許可のチェックを受ける。このダウンチェエはシン・ゴンパ経由、ゴサインクンドへ最短二日間に入れる基地。

結局悪路を九時間五〇分かけて最終目的地シャブルベシ―に一七時三〇分到着。代金は荷物代を含め九〇〇円／一人程度、本当に疲れ切った。宿でシャワーを浴び、ビールで乾杯やつと生き返った。

四月一七日 六時三〇分トレッキング開始。V字状のランタン谷を廻行開始後直ぐに、軍隊のチェック・ポイント。登山道はよく整備されている。パンブーロッジ（二九六〇m）で昼食、三人のポーターの紹介を受けた。ポーターは、各隊員の荷物と共同装備、ポーター

の個人装備を入れると、三〇kg程度担いでくれることになる。

福本、出発前の体調調整悪く不調。今日の目的地ラマ・ホテル（二三四〇m）に着くと同時に、ベッドに倒れ込む。体温三八度を越しており、まったく食欲なくただ眠る。

四月一八日 福本まだ高熱続いているので、全員が一日停滞してくれる。阪本君達はやむなく二時間程のハイキングに行つたとのこと。阪本君がカタクリ粉の重湯を作ってくれたが全く食欲なく食べる事が出来なかった。夜発汗してやつと体温が下がった。

四月一九―二〇日（ラマ・ホテル／ゴーラ・タベラ／ランタン村／キャンジン・ゴンパ）福本の体温三六・七度まで下がったので出発。福本まだ十分回復していないので、阪本リーダーの判断で、ラマ・ホテルから三時間の処にあるゴーラ・タベラまで登り、阪本君、福本、ポーター二人がそこで停滞、谷口君、八太君、アムサン・シエルパは、ランタン村まで足をのばした。

ゴーラ・タベラは、ラリーグラスが咲き乱れ、ランタン・ヒマールの主峰、ランタン・リルン（七二四六m）が見える素晴らしい宿泊地。

四月二〇日 六時三〇分出発。

福本が、平熱まで体温が下がったので、今日はランタン村経由、キャンジン・ゴンパに向かう。キャンジン・ゴンパ（三八四〇m）に一四・〇〇到着。途中ランタン村で昼食をとる。ランタン村の村外れでは、ラマ教の文言（オンマニペメフム蓮の華の上に栄光あ

れ)を右に彫刻したマニ石の垣根の長い道が続いていた。

谷口君達は、午前中キャンジン・ゴンパに到着、午後は裏山にハイキングに行ったとのこと。夕方全員がそろろう。

四月二日 阪本君、谷口君、八太君は一日時間コースのランシサ・カルカに出発。福本は、体調調整の為裏山にハイキング。以下、谷口君の報告。

今回のトレッキングで最も楽しみにしていた最奥のランシサ・カルカへ行く日である。いつもより早く六時前にキャンジンを出発する。福本が同行できないのは真に残念。道は徐々にランタン本流に下り沢沿いに廻る。

振り返ればランタン・リルン、右手(南側)のナヤ・カンガ(五八四六m)とポンゲン・ドプク(五九三〇m)の間には一九五八年深田久弥が南のタルケギャンから越えてきたガンジャ・ラが望める。

ジャタンカルカを過ぎ約半世紀前(一九六四年)島田・上田がBCとしたヌマタンカルカに着く。対面のニヤン沢からの島田達のルートを目で追いガンチェンポ(六二八七m)を望む。ゆつくりと時間を掛け往事を偲んだ。

正面にランシサ・リ(六三二〇m)を見ながらシャルバチュム氷河からの巨大なモレーンを乗越せばそこがランシサ・カルカだった。持参したカタを奉じ旅の安全を祈る。

右手のランシサ氷河の奥にはウルキンマン(六一五一m)、一九四九年ここからパンチポ



ランシサ・カルカから眺めるランタン谷奥の山々

カラに越えたティルマンパスもあの辺りだろうか？

今日出会ったのはガイド兼ポーターを連れた韓国人アラインのみ、キャンジンまでの喧騒が嘘のような静寂であった。

午前中は天候も良く山々を満喫できたが午後になり急に悪化してきたので急いで四時半帰着。途中から降り出した雨は雪に変わり一晩中続いた。(谷口)

四月二日 キャンジン・ゴンパ(三八四〇m) ↓ ゴーラ・タベラ(二九五〇m)

六時三〇分出发、村外れのゴンパにお参りしてお賽銭をあげ、旅の安全を祈願する。

近くにスイス政府のODAで出来た、チーズ工場があるがまだ時期が早く、ヤクの原乳が集まらないので、工場は稼働していなかった。

今日の宿泊地、ゴーラ・タベラまで下る途



キャンジンよりガンチェンポ

中、村の手前で、蕨、深山棘草(ミヤマイラクサ)などの山菜を採る、どうもチベット人は食べないようである。

カトマンドウで日本料理を習っているポーターのビル君が、早速、山菜を灰汁と共に湯掻いてくれ、阪本君がしゅうゆとゴマで美味しい蕨のお浸しを作ってくれた。

又ビル君が深山棘草を、お浸しではなく、モロヘア・スープのような鮮やかな緑色のポータージュを作ってくれた(深山棘草は棘に触ると痛い、彼等は、竹を割った道具を作り、もの見事に柔らかい穂先だけを採集する、このことから判断するとどうも現地の人達は、ミヤマイラクサは食べるようだ)。

一四時ゴーラ・タベラに到着後、午後は洗濯したり、ラリーグラスの写真を撮ったり、各人ゆつたりと休養をした。又ロッジ主人か

ら、自慢のアップルパイを勧められ、チベタン・ティーを楽しんだ。

ロッジから良く見えるランタン・リルンを見上げてみると、頭上をヘリコプターが二機、キャンジン・ゴンパ方面からカトマンドゥ方面に飛んで行くのを見た。誰か高山病に罹り、救出の飛行と思われる。

四月二三日 ゴーラ・タベラ (二九五〇m) ↓ ラマ・ホテル (二三四〇m)

途中ランタン・ヒマールの全貌が良く見える地点があり、各国の遠征隊が挑戦した各尾根(東南稜、南稜、南西稜)がはつきり見えた。ランタン・リルンへの各隊の登頂記録を、阪本君が事前準備してくれ、その記録を各人が読んできていたので、非常に興味深く各尾根を眺めた。九時四五分ラマ・ホテルに到着。今日は休養日、阪本君が作ってくれた、日本



ランタン・リルン南面からの各尾根

食を楽しんだ。

四月二四日 ラマ・ホテル (二三四〇m) ↓ ツロ・シャブル (二二〇〇m)

リムチエからの下りは、谷が深く切れ込んでおり注意して下る。バンブーロッジを過ぎた一七九〇m地点の右岸のオーバーハンクの岩壁に、ハチの巣が幾つか付いている。ロープが垂れ下がっているが、如何にして蜂蜜を採集するのだろうか。

この辺りは、朝の澄み切った空気の中、蝶が舞い、小鳥の囀りが聞こえ、素晴らしいトレッキング道である。ランドスライド・ビュ・ポイントで昼食、此処から今晩の宿泊地ツロ・シャブルが良く見える。ランドスライド地点で、シャブルベンシーからの道と別れ、左手の登り道を取り、一気にツロ・シャブルに向けて五〇〇m登る。途中コゴミを採集しながら登り、村の手前で大きな吊り橋を渡り村に入る。この村は結構、耕地があり豊かそう。各家にラマ教信者であることの証である白い「タルチョー」が林立している。まさに源氏の白旗を見る感じである。また各家では、柏楨(ビャクシン)の青葉を毎朝、フライパンのようなものの上で燻し、香りが高い柏楨の煙は大空に溶け込んでいく。多分これは、天の神様に自分はラマ教徒だと信号を送っているのだろう。

ホテルは何軒かあるが、決して露骨な客引きを、どのロッジもやらないので、気持ちがいい。

結局、阪本君の嗅覚でロッジ「ラマ・ホテル」を選択、なんと二人一部屋一〇〇ルピー

(二二〇円)。おまけに、各室にトイレ、熱湯が出るシャワー付。夜はビール、ロキシーと草蘇鉄(コゴミ)のお浸しで乾杯。

四月二五日 ツロ・シャブル (二二〇〇m) ↓ シン・ゴンパ (三三五〇m)

今日は一〇〇〇m強の登り。途中、ポルラで昼食、此処からは樹林帯の中、ラリーグラスを見ながら、みんなで短歌を作ったりしながら、静かな森林のなかを登る。

途中来年トレッキングを計画している「ガネッシュ・ヒマール」の山々が望まれ、又ランタン・リルンも遠望出来る楽しい登り道であった。宿泊地シン・ゴンパには一三三三〇到着。

シン・ゴンパで、ヤクスの原乳からチーズを作っているチーズ工場見学。ヤクチーズ(セミハード・タイプ)を購入(二kg六五〇円)、



ツロ・シャブル近辺より眺めるガネッシュ山塊

チーズを肴に、今日が誕生日である阪本君の為に、ここまで担ぎあげた最後のウイスキーで誕生パーティーを開いた。夜はロキシーで乾杯、チベタン・フオークソング「レッサン・フィリリ」に合わせみんなで踊る。

四月二十六日 シン・ゴンパ (三三五〇m) ↓
ラウレビナ・ヤク (三九三〇m)

今日は約六〇〇mの登り。何時もの通り、六時三〇分出発。黄色い豆科の低灌木(ピプタンサス・ネパリス) 群生を見ながら登り始め、巨木の林を過ぎると牧場があり、小鳥が鳴き、黄色い花のお花畑の中をのんびりと登る。三五〇〇m地点からラリーグラスに変わり、薄紫色の上品な「チマール」が現れる。九時三五分宿泊地に到着。昼食後、ヘブンリー・パスまで二時間程のハイキング。夜は谷口君が夕食のオーダーを引き受けてくれ、シヤクパ・スープにご飯を入れた雑炊、目新しくして美味かった。

四月二十七日 ラウレビナ・ヤク (三九三〇m) ↓
ゴサインクンド (四二八〇m)

何時もの通り六時三〇分出発。ヘブンリー・パス經由ゴサインクンドの入り口のラウレビナ峠に近付くと、溪流の音がして源流地帯を思わせる。

九・三〇ゴサインクンドに到着、此処は仏教徒、ヒンズー教徒にとっても聖地、煩惱の数だけの一〇八の湖があるという。お祭りの際は、大変な賑わいを見せ、数万人の参拝客が上がつてくるそうだ。

阪本君が二〇〇一年に来た時、美人の奥さんがいたという、ホーリー・レイク・ビュー・

ホテルに宿舎を取る、残念ながら美人の奥さんは下の部落にいたと不在。

八年前に一三歳だった長女が、母親の留守中はロッジの運営をやっており、当時阪本君が撮った写真をプレゼントしてもらい、大喜びであった。

午後高度順応かねて、ヘランブー側のラウレビナ峠 (四六一〇m) までハイキング。明日峠の南側にある四八〇〇mの頂きまで登ろうと相談、一五・〇〇〇mのロッジ帰還。

四月二十八日 福本風邪気味で休養、阪本君達は昨日偵察した山に登りにゆく。
(谷口君のレポート)

福本は休養。ガイドのアムサンと我々三人は昨日登ったラウレビナ峠から南の山にハイキング。

六時四五分出発、峠の南にあるスルヤクンド湖の横から登る。約一時間で頂上に到着。

標高は四八〇〇m位。三六〇度の景色が素晴らしい。

下りは西側へ、ロッジからは見えない上の氷河湖アマクンド湖・チャンドラクンド湖・ズダクンド湖と下りゴサインクンド湖の南辺に出て一三・三〇〇mのロッジ帰還。

道はなくところどころヤクの踏跡が残る素晴らしい半日コースであった。

今回はトレッキング地図三種類に加え阪本の情報をもとに、カトマンドゥでネパール測量局の五万分の一を入手した。この地図には山名などは、殆ど入っていないが標高・地形などは正確でおおいに参考になった。この地図を基にしたトレッキングマップ (NEPA



4月28日 4800m 峰へ。頂上を望む

MAP等)には道路・地名・山名等が入っており併用がいいかもしれない。

半世紀前にはどんな地図で歩いたのだろうか? 島田への土産として地図を購った。

四月二十九日 ゴサインクンド (四二八〇m) ↓
ゴプテ (三四三〇m)

六時三〇分出発、ラウレビナ峠から一気に一三〇〇m下る。途中ペディ (三七六〇m) で昼食。この近くに一九九二年タイ航空エア

バス機が一五余名を乗せて、霧の中、山中に衝突、全員死亡。日本人も六人含まれていたとか。この事故は、エアバス機がバンコクからカトマンドゥに向かう途中、カトマンドゥ空港管制塔より、空港が混雑しているの上空待機命じられ旋回中、霧で視界がきかずこの事故となったらしい。小屋の近くにあ

る日本人が建てた慰霊塔に手を合わせゴプテに向かう。ここからはアッブダウンの激しい道を約二時間三〇分の道のり。

ゴプテには一五・三〇分到着。ゴプテには貧しいパッティが二軒あるだけ。その一軒に泊まるが、主人はインド系の人相の悪い男。このトレッキング中、ロッジの宿泊代は二〇〇ルピー（二六〇円）が一般的にも拘わらず、此処は宿泊費も三〇〇ルピー（三九〇円）、主食のダルバート（豆のカレースープとご飯）も普通は一五〇〜二〇〇ルピーだが、ここは三〇〇ルピー（三九〇円）。阪本君はロシア人のトレッカーと歓談。

四月三〇日 ゴプテ（三四三〇m）↓メランチガオン（二五三〇m）

六時一五分出発。タレパティ峠（三六〇〇m）地点で峠を越えた後、東尾根を下る。阪本君は前回西尾根を下ったので、此処から彼にとつては初めてのコース。峠を越えると非常にきれいなカルカ（放牧地）、そこからの下りはチマールの花が咲き、唐檜林、唐松林の楽しい下り。途中コゴミ、蕨を採集。

一一時四五分、メランチガオン村に到着。今まで歩いた村の中で一番裕福。牧場もあり、又小学校、中学もある立派な村。ロッジの主人ご夫妻は非常に感じよく、ビル君に自由に台所を使わせてくれ、ビル君が夕食に今まで食べた事がないような、おいしいダルバートを作ってくれる。ダルバートがどちらか言うのと苦手な八太君もダルバートのファンになった程である。

五月一日 メランチガオン（二五三〇m）↓

タルケギャン（二七四〇m）

七・〇〇出発。ここから谷底の一八〇〇m地点ナコテガオンまで下り、そこで橋を渡り、タルケギャンまで登りなおすルート。途中母親に付き添われた小学生が、メランチガオンの学校まで通学するのに出会う。なんと一日に七〇〇mの高低差の通学とは吃驚。途中何組かのトレッカーに出会ったが、感じの良い四人組の日本人トレッカーにも出会う。

タルケギャンに一二・一五分到着。広々とした芝生の前庭があるマウント・ビュー・ホテルに宿をとる。我々は、ここで休養も兼ねて二泊するが、何組かのトレッカーは昼食だけとり、先のガンユル^{etc}まで下ってゆく。忙しい現役世代は時間に追われているが、その点我々は、たつぷりに時間が恵まれている。

このロッジのご主人は若い時、カナダとの文化交流生としてトロントに滞在したことがあり、現在は近くの七村の村長的存在。彼によるとタルケギャン村は、一〇〇戸の中実際に住んでいるのは二〇戸程度、村には耕地があまりなく非常に貧しいので、カトマンズ、インドに出稼ぎに出ており過疎化が激しいとの事。

村の中を歩いても多くの家が閉まっており閑散としている。

五月二日 タルケギャンで、一日休息日。

五月三日 タルケギャン（二五五〇m）↓セルマタン（二五九〇m）

セルマタンに向かう途中、対岸の山中に見事な段々畑があり、小さな村が幾つも張り付いている。段々畑の耕作は大変であるし、高

度差のある畑の管理も大変と思うが、やはり谷底は湿度が高く、チベット人は嫌うようである。山から水さえ引ける所なら清潔な山間に、段々畑で作物を作るほうを選ぶようである。又高度が違う村々があるのは、その高度に適した作物を収穫出来るからと思われる。例えば高度が高いところではジャガイモが適し、高度が低いところではトウモロコシ、大麦に適すと言うように住み分け、お互いに作物を交換する経済が成り立っているようである。

一一時一五分セルマタンに到着。急ぐこともないので、この村で一泊のんびりとする。ここセルマタンまで自動車道が上がってきており、急ぐトレッカーは、カトマンズからチャーターした車を呼び下山していった。

五月四日 セルマタン（二五九〇m）↓メラムチ（八七〇m）

六・三〇出発。今日は町に下りる日。ただ自動車道を歩くことになり興ざめ、途中カカニ（一五〇〇m）でお茶を飲み、そこからは自動車道を横切りながら一気にメラムチに下った。一一時四〇分、メラムチに到着。到着した直後に雨が降りだす。早朝出発したお陰で濡れることもなく宿に入った。このメラムチはメラムチ川とインドラ・ワティ川の間で差点で交易のバザールがある。

住民は大半がインド系で険しい顔付き、丁度毛沢東派の大臣が罷免されたこともあり、毛沢東派支持者が村の中をデモ行進しており、異様な雰囲気村であった。

今夜がポーター達と最後の晩であったので、彼等を夕食に招待、各人の働きに応じて、

阪本リーダーよりチップを手渡した。今回のトレッキング中荷物を担ぐので、ポーター達は誰もお酒を飲まなかったが、もう荷物を担ぐこともないのでビル君は今夜初めてお酒を飲んだが、疲れが出たのかすぐにダウン。

五月五日 メラムチ（八七〇m）↓カトマンドウ（一三〇〇m）

朝五時四〇分の乗り合いバスに乗る。前日座席指定券を買ってあるので座席は確保されているが超満員。じっと見ていると女、子供、老人が乗ってくると、自発的に若者達はバスの屋上に移動して、車内に女性を乗せるルールが見受けられた。それにしても、車掌は、お客の乗り降りの誘導、荷物上げ下ろしの手伝い、バス代回収と見事なものである。途中カトマンドウにあと一時間の処で、またはや道路閉鎖（昨日交通事故があり、その保障でもめてとの事）。乗客は文句も言わずバスから降り、バリエードを越えた処にきているバスに乗り込む。行政、警察のコントロール全く効いておらずある種の無政府状態の感がある。

五月六日―五月九日 カトマンドウ滞在

この間カトマンドウ郊外の避暑地「ナガルコット」（二二〇〇m）を訪問。ここからは東にエヴェレスト、正面にゴサインクンド、西にアンナプルナ連峰が見渡せるビュー・ポイントであるが、秋の早朝でないと山々を見るのは難しいとのこと。帰りにカトマンドウ盆地で三番目に大きな古都「バクタブル」に立ち寄る。カトマンドウの旧王宮、パタンに比べて赤茶のレンガ作りの建物がびっしりとあり、マッラ王朝の栄華を偲ぶ事が出来た。

五月九日 帰国

費用とその他

今回の旅行は、阪本君が長年の蓄積したノウ・ハウを駆使して計画を作り上げてくれ、本当にお世話になった。

費用的に言うと同東組（谷口、福本）は関西集合ゆえ、羽田―関空間の航空運賃（二六七〇〇円）が余計にかかっているが、関空出発ベースでは一四万五千円＋US\$1200、合計二六万五千円。これでカトマンドウのホテル代、食事代、山中でのロッド代、ポーター、サードの費用等全て込み。

今回は天候にも非常に恵まれ、雨に降られたのは一度だけ、お陰で気持ちのいいトレッキングを楽しめた。

スケジュール的にも、平均年齢六九・五歳ゆえ、朝は五時起床、六時三〇出発、ロッジ到着は遅くとも午後二―三時。早く出発、早く着くことで、余裕のある旅であった。

個人的に反省することは、出発前の一日日間程、色々なスケジュールを入れ過ぎ、疲労を抱えて山に入り、疲労から一日寝込むことになり、他のメンバーに心配かけたこと。やはり七〇歳になると疲労がたまりやすいので、体調管理は万全を期さないとけないと肝に銘じた次第。

今回のトレッキングでは、現地の四月の中旬には二五〇〇m―三〇〇〇mの高度で、日本と同じ山菜があることを発見、コゴミ（ネパール語「ダー」 蕨（ニューウロ）、ミヤマイラクサ、ぜんまい（今回は時間が無く採集出

来なかった）で、お浸しで毎晩のように作り、現地のお酒（ロキシ）と楽しめたのは、このトレッキングの楽しみを大きく膨らませてくれた。

編集者より ここに掲載しました福本昌弘氏の紀行は、豊富なカラー写真とともにAAC Kのホームページ（www.aack.or.jp）でもご覧いただけます。

お知らせ

中尾佐助スライドデータベースが完成

大阪府立大学学術情報センターには中尾佐助コレクションとして、旧蔵書を含むスライド、スクラップブック、遠征アルバム、フィールドノートなどが大量に保管されている。これらの資料類は「中尾佐助文献・資料総目―照葉樹林文化論の源流」の目録が刊行されているが、このたび、一九五五年のカラコラム遠征から一九八四年の雲南調査までの約二万二千枚のスライドのデータベースが完成し、一般に公開されている。（<http://nakao-db.center.osakafu-u.ac.jp>）

「追悼山口克」刊行

昨年一月に亡くなられた山口克さんを偲んで、このたび「追悼山口克」という小冊子（一三四ページ）を作成し、関係者にはお送りしました。残部がありますので、ご希望の方は、平井一正（khirai@mbx.kyoto-

inet.or.jp 電話075-391-5294) までご連絡ください。一部送料とも二千円で、郵貯銀行00910-4-300231(山口克記念出版会)にお振り込み下さい。

事務局報告

【理事会決議録】

日時 平成二十一年五月一七日(日)

午後一時～午後二時五〇分

場所 京都市左京区吉田河原町

京大会館SR室

出席理事 上田豊、前田栄三、松林公蔵、田

中昌二郎、福寫義宏、前田司、横山宏太郎、

牛田一成、幸島司郎、永田龍、吹田啓一郎、

山田和人、高尾文雄、竹田晋也 以上一四名

委任状によるもの 小林尚礼、松沢哲郎、中

川潔、人見五郎 以上四名

出席監事 西山孝 以上一名

委任状によるもの 伊藤宏範 以上一名

議事の経過および結果

会長上田豊が議長となり、「本日の出席者は定款第二一条第一項に示す定足数に達しているので正式に議事に入る」旨発言があり議事に入った。

第一号議案 平成二〇年度事業報告について

理事吹田啓一郎により平成二〇年度事業報告が説明され、逐一審議の結果、満場一致でこれを承認した。

第二号議案 平成二〇年度収支決算について

理事竹田晋也により平成二〇年度収支決算が説明され、逐一審議の結果、満場一致で承認した。

第三号議案 役員の変更について

議長より任期満了に伴う本会役員の変更について、下記のとおり改選候補者案が提出され、審議の結果満場一致で候補者とすることを承認した。

理事 上田豊(会長)、山岸久雄(副会長)、

松林公蔵(副会長)、田中昌二郎、前

田司、前田栄三、横山宏太郎、松沢哲

郎、牛田一成、幸島司郎、中川潔、永

田龍、人見五郎、吹田啓一郎、高尾文

雄、竹田晋也、小林尚礼

監事 福寫義宏、伊藤宏範

第四号議案 新入会員について

事務局より下記三名の本会入会申請者の紹介があり、満場一致で承認した。

福森 亮二、川田 邦夫、飯田 肇

第五号議案 京都府立大学事故調査委員会への協力について

理事牛田一成より二〇〇九年五月に発生した京都府立大学山岳部の北アルプス鳴沢岳における遭難死亡事故の事故調査委員会へ、本会理事松林公蔵と横山宏太郎が協力することについて依頼があり、審議の結果満場一致で承認した。

議長より「本日の社団法人京都大学学士山

岳会理事会の議事は以上をもって終了したので、議事の経過は議事録にまとめ、その末尾に議長ならびに理事二名が署名捺印すること

と」として閉会を宣言した。

平成二十一年五月一七日

社団法人 京都大学学士山岳会理事会

報告事項

一 公益法人改革への対応について

前田栄三理事により作成された公益法人改革への対応の方針案、ならびに吹田理事により作成された京都府総務部公益法人担当者との面談の報告が説明され、次の点を確認した。

一、一般社団法人への移行を検討する。

二、京都大学の委任経理金への寄付は、解散時の寄付先として検討するものとし、一般社団法人への移行に際しては公益目的支出計画により公益目的財産を支出することを検討する。

三、一般社団法人としての新定款は現在の定款を一般社団法人に適した形態に修正する。現定款の第六条で正会員は「京都大学関係者ならびに一般の登山家」と規定されているが、後者を「一般の山岳愛好者」として門戸を広げる表現に改める。

四、新しい定款の目的は現定款を踏襲する。登山に限らずフィールドワークなどの多様な活動も含めるなどの方針に関する議論は平行して進めるが、法人改革への対応は事務的な手続きの検討を急ぎ進める。活動内容の多様化については現定款の目的の範囲で対応できると考えられる。

五、事業報告にある笹ヶ峰ヒュッテの登山講習会をより充実させるなどの提案も出された。

二 山岳遭難対策について

AACK会員の個人山行の安全対策および遭難事故時のAACKとして取り得る対策について、理事高尾により作成された提案を検討した。会員には遭難事故対策として個人で取り得る方法をニューズレターにより伝えること、AACKとして遭難救援を組織的に対応することは難しく、山岳共済の加入を推奨して安全意識を高めること、遭難時の連絡体制を検討すること、初動金貸し出しの基金を予算化することが提案され、高尾理事により検討することとした。

三 梅里雪山峰登山隊について

昨年度の現地捜索活動により、明永村の協力を得て小林尚礼理事の現地訪問で少量の遺品が確認されたことが報告された。以上

【総会決議録】

日時 平成二十一年五月十七日(日)

午後三時～午後四時三〇分

場所 京都市左京区吉田河原町

京大会館SR号室

正会員の総数 二五〇名

出席者数 一七三名

(うち委任状出席 一三四名)

議事の経過および結果

上記のとおり定款所定数の出席があり本会は適法に成立したので理事(会長)上田豊が定款の規定により議長となり、下記議案の審議に入った。

第一号議案 平成二〇年度事業報告および収支決算について

担当の者より平成二〇年度事業報告および収支決算について報告があり、逐一審議の結果、満場一致でこれを承認可決した。

第二号議案 平成二一年度事業計画および収支予算について

議長は原案について担当者に説明を行わせ、これを議場に諮ったところ、満場一致で原案どおり承認可決した。

第三号議案 理事の選任について

同日、先に開催された理事会において承認を得た、役員の選任候補者について、逐一審議の結果、満場一致でこれを承認可決した。

理事 上田豊(会長)、山岸久雄(副会長)、

松林公藏(副会長)、田中昌二郎、前

田司、前田栄三、横山宏太郎、松沢哲

郎、牛田一成、幸島司郎、中川潔、永

田龍、人見五郎、吹田啓一郎、高尾文

雄、竹田晋也、小林尚礼

監事

福寫義宏、伊藤宏範

以上をもつて議案全部の審議を終了したので午後四時三〇分議長は閉会を宣し解散した。上記の決議を明確にするため議長および議事録署名人において次のとおり署名押印する。

平成二十一年五月十七日

社団法人 京都大学学士山岳会総会

報告事項

一 新入会員について

理事会において承認を得た下記四名の本人入会者が紹介された。

遠藤 州、福森 亮二、川田 邦夫、

飯田 肇

二 公益法人改革への対応について

前田栄三理事により作成された公益法人改革への対応の方針案、ならびに吹田理事により作成された京都府総務部公益法人担当者との面談の報告が説明された。一般社団法人への移行を検討することが承認された。新法人の公益目的財産については公益目的支出計画を作成して京都府の承認を受け、できるだけ早く移行の可能性を確認することが承認された。

二 梅里雪山峰登山隊について

昨年度の現地捜索活動により、明永村の協力を得て小林尚礼理事の現地訪問で少量の遺品が確認されたことが報告された。

三 二〇一〇年度はノシヤック峰登頂の五〇周年に当たするため、ポーランド山岳会と連絡を取り記念事業を実施することを事業として検討することが確認された。

四 会員平井一正よりチョゴリザ登頂五〇周年の記念シンポジウムの開催が報告され、関係者への謝意が表明された。 以上

会員動向

互の「連絡・研修」を願って滞ることなく刊
行できたのは、本誌に対する会員の熱意の賜
物

編集後記

一九六六年五月にこのニュースレター創刊
号を上梓してから十三年。季刊で刊行してこ
こに五十号をお届けする。山を舞台に会員相

編集委員

前田 司

発行日 二〇〇九年八月末日

発行所 京都大学学士山岳会

〒六五―八五四〇

京都市西京区京都大学桂

京都大学工学研究科建築学専攻

吹田啓一郎 気付

製作 京都市北区小山西花池町一―八

(株)土倉事務所

パタゴニア氷河研究に情熱を傾けたチョータ
ローさん 安仁屋政武
ヘルマン・プール夫人との会見記 平井一正
チョゴリザ初登頂記念シンポジウムと記念祝賀会
前田 司、高村奉樹

図書紹介

松方恭子編：『妻におくった九十九枚の絵葉書』
伊藤愿の滞欧日録 平井一正
『ゴローのヒマラヤ回想録』を読む 斎藤清明
会員動向

第 48 号 (2009 年 2 月末日発行)

ロールワリン・ヒマラヤ「ラムドン・ピーク
(五九二五 m) 登頂」—平均年齢六八・五歳の
熟年登山隊六名全員登頂の記録— (二〇〇八
年一〇月一〇日～一十一月一八日) 阪本公一
年金登山事始 二題

キリマンジャロ登頂とサファリ紀行
トラウマを抜けるとそこは 安田隆彦
OKYAN2008 の報告 (兵庫県西播磨 東山と植松
山の山行記録) 潮崎安弘

チョゴリザ初登頂五〇周年記念シンポジウム講
演抄 (上)
開会挨拶 上田 豊
高所医学からフィールド医学へ 松林公蔵
南極初越冬とその後の五〇年 横山宏太郎
雪氷生物学から野生動物研究へ—雪虫からイ
ルカまで— 幸島司郎

図書紹介

『ブッシュマン、永遠に。』 松浦祥次郎
AACK 海外登山・探検助成制度の案内
日本山岳協会・山岳共済の案内
会員動向
訂正とお詫び

第 49 号 (2009 年 5 月末日発行)

藤田和夫氏を偲ぶ—その業績と資料
今西探検隊を支えた多才な探検技術者
沖津文雄
藤田和夫さんと活構造の研究 尾池和夫
フィールドワークを伝える二つの写真集
市川光雄
チョゴリザ初登頂五〇周年記念シンポジウム講
演抄 (下)

チョゴリザ登頂から五〇年—未知への情熱を
育てた京都大学山岳部の土壌 平井一正

海外からのメッセージ

ニコラス・クリンチ氏からの祝辞
ワルター・ボナッティ氏のメッセージ
映画「カラコルム」と「花嫁の峰チョゴリザ」
の一般公開について

西堀栄三郎先生と私—カカニの丘での記念碑建
立を巡って 神原 達
追悼 山口トボトボどこへゆく 廣瀬幸治
図書紹介

伊藤一著
「われら北極観測隊」
「レナ川—白夜航路四〇〇〇キロを行く」
「BAM に乗ろう—ロシア的鉄道旅行術」
平井一正

事務局報告

会員動向

第 50 号 (2009 年 8 月末日発行)

送別の辞 川喜田二郎さん 上田 豊
ランタン・ゴサインクンド・ヘランブー トレッ
キング (二〇〇九年四月一—二日—五月九日)
福本昌弘

お知らせ

事務局報告

会員動向

総目次

編集委員一覧

1 号～ 8 号 平井一正、酒井敏明、薬師義美
9 号～13 号 新井 浩、吹田啓一郎、竹田晋也
14 号～21 号 沖津文雄、吹田啓一郎、竹田晋也
22 号～29 号 北村泰一、上田 豊、松林公蔵
30 号～42 号 田中昌二郎
43 号～50 号 前田 司

バックナンバー (一部) は AACK のホーム
ページ (www.aack.or.jp) でもご覧になれます。

AACK 人物抄 浅井東一さん (一九〇四～
一九八一) 平井一正
崗日嘎布山群の山名と地図について 松本徭夫
雲南・東蔵考察団道中記 (下) 田中昌二郎
尾瀬・長蔵小屋 訪問 新井 浩
事務局報告
会員動向

第 43 号 (2007 年 11 月末日発行)

崑崙山脈西部の山旅「六二三二 m 峰 & 六四六八 m
峰初登頂」一二〇〇七年七～八月の記録—
芝田正樹
ジャマイカでの三年 安田隆彦
『大日岳の事故と事件』を巡って 斎藤清明
ブータン王国の新憲法 栗田靖之
南極 OB 会京都支部の創設と記念シンポジウム
の報告 西山 孝
ムラカミさんへのメッセージ
平井一正・能田 成・横山宏太郎

図書紹介

「ヒマラヤの東 崗日嘎布山群—調査と探検
史」—書評と松本徭夫氏の紹介— 平井一正
「サトイモの絵本」 小西達夫
訂正

AACK 海外登山・探検助成制度の案内
会員動向

第 44 号 (2008 年 2 月末日発行)

ラダック・ザンスカール トレッキング紀行—
ザンスカールの峠「シンクーラ SHINKUL
LA」(五〇八〇 m) を越えて北インド平原へ
— (前編) 松浦祥次郎
スコットランドの山に登る 中島道郎
OKYAN' 2007 の報告 (兵庫県 砥峰高原と藤無
山の山行記録) 潮崎安弘
AACK 人物抄 宮木靖雅 (一九四〇年四月～
一九七一年七月) 平井一正

日本山岳協会・山岳共済の案内
事務局連絡
会員動向

第 45 号 (2008 年 4 月末日発行)

空撮で見たヒマラヤの変貌 上田 豊
ラダック・ザンスカール トレッキング紀行—

ザンスカールの峠「シンクーラ SHINKUL
LA」(五〇八〇 m) を越えて北インド平原へ
— (後編) 松浦祥次郎
紀行・「ゴビ、アルタイから新疆へ (西モンゴル
横断の旅)」 寺本 巖
「高地文明」への旅 斎藤清明
AACK 人物抄 宮木靖雅 (続) 平井一正
白神山地にひとり遊ぶ 荻野和彦
図書紹介

黄河断流—中国巨大河川をめぐる水と環境問
題 福寫義宏著 昭和堂 高村奉樹
AACK が京都大学に寄贈した「国際登山探検文
献センター図書」はどうなっているのか?
竹田晋也

事務局連絡
会員動向

第 46 号 (2008 年 8 月末日発行)

チョゴリザ初登頂五〇周年記念特集号
アタックの思い出 平井一正
チョゴリザで思い出すこと 中島道郎
「チョゴリザ」の時代 高村奉樹
高所用バーナーについての考察 岩坪五郎
桑原チョゴリサ登山隊長のこと 芳賀孝郎
飛び入りのチョゴリザ 今川好則
今川さんの文章を読んで・追記 高村奉樹
チョゴリザのおたふく狸と高所医学 斎藤惇生
チョゴリザ登頂五〇年 近藤良夫
チョゴリザ関係文献
事務局報告
会員動向
訂正
チョゴリザ登頂五〇周年記念シンポジウム案内

第 47 号 (2008 年 11 月末日発行)

北海道大雪山クワウンナイ川遡行記 二〇〇八
年七月二六日～二八日 安仁屋政武
シャクルトンの子孫に会う 平井一正、酒井敏明
国際山岳連盟医療委員会制定公式基準のご紹介
中島道郎
妙高スキー合宿へ 山スキー技術向上のために
田中昌二郎
追悼
中島暢太郎先生を偲んで 幸島司郎

知らせ

「京大探検部」
「快樂登山のすすめ」

高村奉樹
阪本公一

第 37 号 (2005 年 12 月末日発行)

通える夢は崑崙の……

一崑崙山脈未踏峰 (六三四五 m) 登頂一

岩瀬との約束 伊藤寿男

五三年前の厳冬期知床遠征をふりかえって (そ
の二) 本隊の行動 斎藤惇生

AACK 人物抄 田中喜左衛門さん (一八七七・
明治九年～一九四三・昭和一八年) 平井一正
ボリビア・アンデスの山旅 (その二) 阪本公一
第九回「岡山のを登る会」(駒の尾山・船木山・
後山の山行記録) 潮崎安弘

日本山岳協会・山岳共済 (一般共済) の案内

AACK 海外登山・探検助成制度の案内

訂正

第 38 号 (2006 年 4 月末日発行)

アフリカ縦断の旅 第一部 田中二郎

雲南懇話会 第一回 Field Work 報告

梅里雪山周辺の氷河と環境変化 安仁屋政武
「明永村、雨崩村を訪ねて」 泉谷洋光

AACK 人物抄 細野重雄さん (一九〇八～
一九五八) 平井一正

五三年前の厳冬期知床遠征をふりかえって (そ
の三) 第二次計画 知床五〇周年 斎藤惇生

「OKK ニュース No.1」について 寺本 巖
嘉友岩倉哲男会員を悼み偲ぶ 松浦祥次郎

理事会議事録

日本山岳協会・山岳共済への加入のお礼とお願
い

「雲南懇話会」報告とフィールドワークの予定等

会員動向

第 39 号 (2006 年 7 月末日発行)

アフリカ縦断の旅 第二部 田中二郎

AACK 人物抄 奥貞雄さん (一九〇七～
一九八七) 平井一正

知床岬→知床岳厳冬期初縦走一私の『世界最悪
の旅』一 中島道郎

剣一周パノラマコース 高尾文雄

日本オートルート報告 川久保忠通

図書紹介

事務局報告

会員動向

お知らせ

第 40 号 (2006 年 12 月末日発行)

川旅 シーンジェック 寺島 彰

AACK 人物抄 酒戸弥二郎さん (一九〇六～
一九七六) 平井一正

ビアフォー氷河・ヒスパー氷河トレッキング
(二〇〇六年六月二四日～七月二四日)

アフリカ縦断の旅 第三部 阪本公一

南極観測五〇周年記念 田中二郎

第一次隊員 芦嶽の五人衆に聞く 新井 浩

中・高年登山者のための一五の医学的備忘録
松林公蔵

荣誉・受賞のお知らせ

会員異動

第 41 号 (2007 年 4 月末日発行)

梅里雪山峰遭難記念碑建立の報告
中川潔、左右田健次

梅里雪山 搜索活動の報告 小林尚礼

AACK 人物抄 谷博さん (一九一〇～一九八八)
平井一正

青海から西藏、雲南の旅の報告 青蔵鉄道乗車記
斎藤惇生

第十回「岡山のを登る会」 潮崎安弘

雲南・東蔵考察団道中記 (上) 田中昌二郎

東チベット山村の住居 松井千秋

茶馬古道—グローバリゼーションとローカリズム

松林公蔵

茶馬古道 東チベット一八〇〇kmキャラバン

石根昌幸

事務局報告・理事会議事録

AACK 海外登山・探検助成制度の案内

日本山岳協会・山岳共済の案内

AACK 総会の案内

会員動向

第 42 号 (2007 年 7 月末日発行)

AACK の今・これから 上田 豊

第31号 (2004年5月末日発行)

北アルプス大日岳山行一事故が事件になった、
どうするか、登山家として科学者として—

荻野和彦・岩坪五郎

西藏旅游消息

笹谷哲也

アンナプルナとマオイスト

阪本公一

ヨーロッパ山スキー報告

高尾文雄

ヒュッテ管理苦勞話 笹ヶ峰ヒュッテ管理委員会

秋田雅規

理事会決議録

お知らせ

会員動向

第32号 (2004年9月末日発行)

フォスコ・マライーニの死にちなんで 谷 泰

河口慧海と宮崎武夫 平井一正

ベルニナ国際登山医学研修会 (平成十六年春)

参加報告 中島道郎

第二次梅里雪山峰登山隊の収容作業報告

吹田啓一郎

大日岳事件に不起訴決定 田中昌二郎

新入会員紹介・奥宮清人氏 松林公蔵

事務局報告

会員動向

第33号 (2004年12月末日発行)

梅里再訪 松林公蔵

AACK 人物抄 宮崎武夫さん (一九〇五～

一九四五) 平井一正

フォスコ・マライーニさん、ありがとう

本多勝一

妙高の雪 横山宏太郎

五月連休にヒュッテからワンデイで楽しめる山

スキーコース (その一) 高尾文雄

アムネマチンと黄河源流を訪ねて 中島道郎

大日岳遭難「事故」は「事件」研究会へ

荻野和彦・岩坪五郎

東チベット最深部・怒江源流域から雲南の旅

田中昌二郎

ヤルン・カンのサーダー・カルマ、四年おくれ

の訃報 上田 豊

事務局報告

栄誉

訂正

第34号 (2005年3月末日発行)

AACK 人物抄 伊藤愿 (イトウスナオ) さん
(一九〇八～一九五六) 平井一正

雲南懇話会

雲南懇話会言始め

松浦祥次郎

雲南懇話会の概要

前田栄三

雲南・チベット地域の学術調査 安仁屋政武

大日岳の「雪庇」調査計画発表される

五月連休にヒュッテからワンデイで楽しめる山

スキーコース (その二)

高尾文雄

図書紹介『山の世界』

酒井敏明

会員動向

第35号 (2005年7月末日発行)

大日岳積雪地形調査がおわかりました

荻野和彦・岩坪五郎

AACK 人物抄 鈴木信さん (一九一一～

一九七九)

平井一正

大日岳遭難について

本多勝一

理事会決議録

総会決議録

海外登山・探検助成制度の創設

AACK 遠征基金について

日本山岳協会・山岳共済 (一般共済) について

新入会員の紹介—栗本俊和氏— 前田栄三

—書籍紹介—

「山・わが生きる力」

白旗史郎著 (新日本出版社)

阪本公一

会員動向

訂正

雲南懇話会のご報告と Field Work のご案内

第36号 (2005年9月末日発行)

五三年前の厳冬期知床遠征をふりかえって (そ

の一) 発端と岬隊の記録

斎藤惇生

ボリビア・アンデスの山旅 (その一) 阪本公一

AACK 人物抄 伊藤洋平さん (一九二三～

一九八五)

平井一正

伊藤洋平氏について

廣瀬幸治

鈴木信さん追補—野田吉兵衛、近藤公夫両氏か

らのコメントの紹介—

平井一正

会員動向

訂正

第二回雲南懇話会と第一回「Field Work」のお

A9 社団法人 AACK と笹ヶ峰会	中島道郎	文化としての登山	川瀬裕史
A10 ああしんど余計なことを	伊藤 一	訃報	
A11 AACZ と AACK	平井一正		
臨時特集 急逝岩瀬時郎氏		第 28・29 号 (2003 年 9 月末日発行)	
「通える夢」か「幻」か	前田栄三	新会長あいさつ	
現役時代の岩瀬と私	吉野熙道	A14 AACK のこれから	木村雅昭
岩瀬さんの思い出	木村雅昭	言わせてくれエー反論—	
「通える夢は崑崙の」岩瀬時郎君を偲ぶ		B2 本多論文に反論する	北村泰一
	伊藤寿男	特集 AACK のゆくべき道	
「川を走る～走遊会七年の記録」	岩瀬時郎	A15 パイオニアのゆく道	梅棹忠夫
付録 略歴		A16 ノジャックとその後	酒井敏明
ビデオ批判にコメント	平井一正	A17 AACK は進化しよう	北村泰一
会員動向		特集 言いたい放題—批判—	
		B3 これでよいのか AACK・その 2	北村泰一
第 25 号 (2002 年 8 月末日発行)		特集 若者を集めよう	
特集 AACK の行くべき道		C1 若者を集めよう～ AACK・山岳部共催の	
A12 AACK の今後の道	藤本栄之助	中学生向け講演会～	松井敦男
特集 言いたい放題・批判		C2 若者を集めよう～ AACK を少しでも知っ	
B1 これでよいのか AACK	北村泰一	てもらおう～	北村泰一、松林公蔵
言わせてくれエー反論—		特別寄稿 日本山岳会入会当時の思い出	芳賀芳郎
カンペンチンとメイリーの発想について		回想の山々	
	山口 克	チョゴリザその後—いままでどのくらい登ら	
山口と平井の腐れ縁	平井一正	れているか—	平井一正
臨時特集 内外山行紀行文 その 1		知床初縦走 50 周年記念講演会	中島道郎
クリチェフスカヤ紀行～岩瀬時郎氏に捧ぐ		知床 50 年	廣瀬幸治
	曾根原恵夫	理事会 理事会・総会報告	
理事会議事録		お知らせ 第 2 回南極半島ツアー	北村泰一
お知らせ 登山探検文献センターの行方			
西堀生誕百年事業		第 30 号 (2004 年 1 月末日発行)	
南極ツアー		黄河源流	福嶋義宏
		秘境の最高峰—ルオニイ峰	平井一正
第 26・27 合併号 (2003 年 3 月末日発行)		ウェストバットレスからのマッキンリー登頂	睦好正治
特集 AACK の行くべき道		憧れのジョン・ミュアー・トレールを歩く	阪本公一
A13 50 年近く前にすんだ議論では?	本多勝一	オツルミズ沢	高尾文雄
内外山行紀行文		追悼	
グリーンランド紀行	北村泰一	「さよなら」藤平	舟橋明賢
アコンカグア東面からの登頂記	睦好正治	藤平さんを悼む	平井一正
ケニア山調査・登頂記	安仁屋政武	梅里雪山峰の二〇〇三年収容作業報告	吹田啓一郎
康南の秀峰ダンチェツエンラ (5833m) 初登頂	阪本公一	訃報	
東ネパール・アルン川流域訪問記	今井一郎		
南アルプス縦走	饗庭邦光		
山の文学・随想、研究 (その 1)			

「西大巔」登山記「中」—森本陸世君不慮の死
前後 本多勝一
第4回 岡山の山を登る会 川崎 徹
山岳研究
山スキー、最新道具事情 高尾文雄
教育的登山論シリーズ 第三章 登山べから
ず十訓 中島道郎
梅里雪山報告 今夏の明永氷河における収容作
業について
追悼 安田 武先生—ゴアテックスとフィール
ドテスト 横山宏太郎
お知らせ AACK 映像記録調査その後、ニュー
スレター編集長募集
会員情報
関東新年の会案内
著者紹介—編集記にかえて
安仁屋政武著「パタゴニア」 沖津文雄

第20号 (2001年5月10日発行)

紀行 極西北ネパール国境地帯に行く 新井 浩
「西大巔」登山記「下」—森本陸世君不慮の死
前後 本多勝一
只見川袖沢御神楽沢 芝田誠通
随想 南極を夢見た頃—今西さんと園子夫人の
思い出 北村泰一
会員情報
追悼 一澤さんを悼む 平井一正
お知らせ 理事会報告
関係団体行事カレンダー

第20号別冊 (2001年5月10日発行)

桑原さんの追憶 藤平正夫

第21号 (2001年8月20日発行)

紀行 崑崙山脈 6540メートルの未踏峰登頂記
田中昌二郎
「西大巔」登山記「追記」—森本陸世氏との最
後の山行 沖津文雄
山岳研究 教育的登山論シリーズ 第四章 山
歩きの服装 中島道郎
特別寄稿 森本陸世君の死に関連して、同行諸
君の手紙 斎藤惇生
山岳部創世記 京大山岳部の創生 藤平正夫
京大山岳部時代を思いでのままに 舟橋明賢

山岳部に入った頃 川口 章
京大山岳部創立の頃
お知らせ 訃報
著書紹介 山本紀夫、稲村哲也編著「ヒマラヤ
環境誌」 沖津文雄
関係団体行事カレンダー

第22号 (2001年11月20日発行)

特集 A1 AACKの登山哲学とは? 川瀬裕史
A2 慌てたらアカンデー 岩坪五郎
A3 ここまで来たAACK 高村奉樹
紀行文 未知の山を求めて 平井一正
新刊書紹介 日本登山医学研究会編「登山の医
学ハンドブック」 松林公蔵
報告 映画史「ヒマラヤへの道」製作にあたり
平井一正
弔意 一澤オヤジの思い出 北村泰一
会員動向
旅行案内 グリーンランドへの旅 北村泰一

第23号 (2001年2月20日発行)

特集 AACKのゆく道
A4 AACKサロンの提案 広瀬幸治
A5 AACKは生き返れるか 高尾文雄
A6 AACKの将来は学術登山か 安仁屋政武
A7 壁があれば登ろう 新天地があるではな
いか その1 北村泰一
臨時特集 ビデオ「ヒマラヤへの道」を見ての
感想

「映像史ヒマラヤへの道」を見て 山口 克
AACK七十年に想う 藤本栄之助
ヒマラヤへの道を観ての感想と提案 北村泰一
ビデオ「ヒマラヤへの道」を観て 睦好正治
梅里雪山始末記 小林尚礼
「ペルケオ」の研究 寺本 巖
お知らせ 「クルト・ディームベルガー講演と映
画の夕べ」
京都大学総合博物館秋季企画展「今西錦司の
世界—京大のパイオニアワーク」
会員動向と訃報

第24号 (2002年5月20日発行)

特集 AACKの行く道
A8 AACKの哲学 松林公蔵

第13号 (1999年6月12日発行)

AACK 総会出席者の皆様へ 斎藤惇生
AACK の皆様へ 小林尚礼
「雪山讃歌」の歌詞著作権由来記 高村奉樹
チョモランマ登頂狂想曲 安仁屋政武
「レニエ山、1969年」 松浦祥次郎
記録 北ア・立山山頂から剣岳北方・毛勝山間
でのスキー滑降 高尾文雄
談話室
速報 「遺体発見の通知」
お知らせ 梅里雪山法要、AACK 総会、笹ヶ峰
ヒュッテ改築工事

第14号 (1999年9月30日発行)

紀行 ブータン氷河湖決壊洪水調査記 上田 豊
富士の裾野に秘境あり 新井 浩
山岳研究 山と雲と蕃人と 広瀬幸治
随想 「亀」と「岡長」のこと 四手井綱英
梅里雪山報告「梅里雪山勇士記念碑」除幕式に
参列して 船原 尚
梅里雪山峰登山隊捜索報告から抜粋
遥かなる徳欽より 小林尚礼
ヒュッテ再建
笹ヶ峰ヒュッテの片づけと地鎮祭 横山宏太郎
ヒュッテ再建進捗状況 田中二郎
お知らせ 梅里雪山・氷河トレッキングと玉龍
雪山ハイキング11日間、関東木曜日の会、米
本昌平氏「吉野作造賞」を受賞
会員動向
訃報

第15号 (2000年1月30日発行)

紀行 白きマウント・レーニア 阪本公一
山岳研究 群馬県の山々 前編 岩瀬時郎
特集 「西堀かるたカレンダー」購入と配布ご協
力をお願い 井上 潤
随想 「ヒュッテ回想」 近藤良夫
報告 梅里雪山関係報告会と慰労会、笹ヶ峰
ヒュッテ完工、関東新年会
追悼 小浜維人
追悼 谷口 朗
小浜小屋一追悼 笠原大四郎
追悼 塩瀬捷一郎
仲間の真ん中 小浜を失うの記 酒井尚平

第16号 (2000年4月20日発行)

紀行 ヒュッテ探訪記 能田 成
山岳研究 群馬県の山々 後編 岩瀬時郎
お知らせ 二〇〇〇年総会開催日、ヒュッテ管
理について、連絡先
追悼 森本陸世 山岸久雄
行事カレンダー
所蔵品移転
理事会報告
訃報

第17号 (2000年8月8日発行)

紀行 「西大巔」登山記「上」一森本陸世君不慮
の死前後 本多勝一
山岳研究 教育的登山論シリーズ 序論 中島道郎
随想 富士村山浅間神社を訪ねる 新井 浩
記録 妙高山外輪山スキー事故顛末記 平井一正
梅里雪山報告 明永氷河における収容作業につ
いて
お知らせ 映像資料調査のお願い、会長より、
AACK への電話連絡、転居
www.aack.or.jp より 上石見の大倉山に登りま
した デルファー高村
理事会決議録
総会決議録
追悼 林 一彦 お別れの言葉 斎藤惇生
関係団体行事カレンダー

第18号 (2000年10月20日発行)

山岳研究
新日本オートルート 高尾文雄
教育的登山論シリーズ 第二章 登山必携十品 中島道郎
随想 ベック・ウェザーズ教授に会ったこと 伊藤寿男
お知らせ 林 一彦さんの追悼集原稿執筆の依頼 頼
新会員自己紹介 古瀬俊介
山とローソク 二題 清水節男
訃報

第19号 (2001年1月20日発行)

紀行 タアパカ火山 (5824メートル) 登頂とチ
リーの登山事情 中島道郎

書評 中村 進著「未知への旅—南極点スキー
マラソン—」 酒井敏明

会務報告

梅里雪山学術登山隊に対する会員および関係者
個人募金 (1997・2・28 現在)

第6号 (1997年8月30日発行)

会長就任にあたって 上尾庄一郎
新・日本 オートルート 高尾文雄
カナダの山岳ガイドたち 芳賀孝郎
エディンバラ大学滞在とパタゴニアの氷河
安仁屋政武
ラ・コンダミーヌ探検隊のこと 酒井敏明
会務報告

第7号 (1997年11月30日発行)

梅里雪山の失敗 なぜサイクロンの影におびえ
たのか 平井一正
縮小加速・ヒマラヤの氷河とAACK 上田 豊
これからの山登り—AACKの今後に向けて—
今井一郎
京大百周年記念展
AACK人物抄 高橋健治さん—その5(最終回)—
斎藤清明
妙高山外輪、三田原山の雪崩について
横山宏太郎
仮ホームページのご案内 原田道雄

第8号 (1998年2月20日発行)

京大山岳部前史 平井一正
キリマンジャロ登頂記 安仁屋政武
書評 平井一正著「初登頂」によせて 能田 成
第3回登山と高所環境に関する国際医学会議と
第16回日本登山医学シンポジウムへのお誘い
中島道郎

第9号 (1998年5月10日発行)

山の思い出 竹内佐郎
国際登山・探検文献センター 創設二十五年に
想う 前田 司
キリマンジャロ登頂記(続き) 安仁屋政武
談話室
お知らせ 薬師氏ゲスナー賞受賞、熊楠賞に四
手井氏、松尾氏が名古屋大学学長に、雪崩ビー

コン購入、寄贈金、会員動向

第10号 (1998年9月30日発行)

「梅里雪山」八月七日下午骨灰、遺物交接儀式
岩坪五郎
チョゴリザ初登頂四〇周年記念 バルトロト
レッキング 平井一正
ヒマラヤ文献目録ができるまで 薬師義美
記録 北ア・剣岳山頂からのスキー滑降
高尾文雄
ブータンの僧院火災と再建支援活動について
月原敏博
談話室
「チョゴリザ初登頂四〇周年 記念講演会・パー
ティ」

第11号 (1998年12月20日発行)

チョゴリザ初登頂四〇周年記念特集号
実行委員長 平井一正
第一部 記念講演
挨拶 上尾庄一郎 祝辞 村木潤次郎氏
「ヒドンピークとチョゴリザ」ニコラス・B・
クリンチ氏
第二部 パネル討論会
斎藤清明、藤平正夫、平林克敏氏、井上達男氏、
松沢哲郎、斎藤惇生、中村 保氏、宮川清明氏、
遠藤京子氏
第三部 ビデオ上映「花嫁の峰チョゴリザ」
閉会の挨拶 田中二郎
ワルター・ボナッティ夫妻歓迎会
お知らせ 近藤良夫氏 二つの受賞、日本山岳
会「秩父宮記念山岳賞」に薬師義美氏、高村
奉樹氏の受賞

第12号 (1999年3月1日発行)

笹ヶ峰降ヒュッテ・改築めざす 新井 浩
潮田カメラマンとチョゴリザ 平井一正
東ネパール・タムール川流域訪問記 今井一郎
厳冬期甲斐駒ヶ岳登山 阪本公一
富士山、復活の須山口登山道 新井 浩
首都圏の新年会 岩瀬時郎
いまどきのいっかいせい 山田和人
談話室
お知らせ 遠征隊参加、荣誉、物故

AACK ニュースレター 総目次 (1 ~ 50 号)

第1号 (1996年5月26日発行)

巻頭のことば	高村奉樹
梅里雪山計画 その後	
海外の山の計画 チンボラソ	酒井敏明
活動報告	
最近の南極から一ドームふじ観測拠点など	横山宏太郎
第二回野生医学世界会議報告	中島道郎
AACK 会員動向 (過去5年間)	
AACK 人物抄 高橋健治さん—その1—	斎藤清明
笹ヶ峰ヒュッテの現状	岩坪五郎
書評 平井一正著「初登頂—花嫁の峰から天帝の峰へ」	しあわせな登山 広瀬幸治
私の体験 年寄り高山病に気をつける	北村泰一
会務報告	
言いたい放題 AACKの黄昏に思う	本多勝一

第2号 (1996年8月31日発行)

梅里雪山 再挑戦に当たって 総隊長	斎藤惇生
梅里雪山計画 その後の経緯	
活動計画	
ウイルヘルム山に登る	原田道雄
ブータン、ミャンマー、ラオス (1996年)	安田隆彦
書評 中島暢太郎 (文)、近藤裕史 (写真) 著「パタゴニア氷河紀行」	福嶋義宏
追悼 わが友土倉九三君を偲ぶ	川喜田二郎
AACK 人物抄 高橋健治さん—その2—	斎藤清明
私の体験 一酸化炭素中毒事件	阪本公一
日本登山の研究を考える Wolfram Manzenreiter	
言いたい放題 登山は競技なりや	竹内道雄

第3号 (1996年1月25日発行)

梅里雪山学術登山隊出発	
アンケート「私はなぜAACKにはいらなかったのか」	
アンケートの結果について	

AACK に関して思うこと	内藤 望
AACK の抱える問題点	中村 真
ある体験 高山病と二日酔いの奇妙な関連性について	中島道郎
世界最遠峰「チンボラソ」登山	伊藤寿男
中年登山と高度順化—チンボラソ登山の経験から	山本武久
言いたい放題 コンロンはなぜ有名か? —AACK よ、記録を残そう—	北村泰一
梅里雪山学術登山隊に対する会員および関係者個人募金 (1996・10・23 現在)	

第4号 (1997年2月28日発行)

梅里雪山をあとに	高村奉樹
梅里雪山学術登山隊報告とお礼	斎藤惇生
登山隊行動概要	人見五郎
撤退の判断に至った経過といくつかの問題点について	人見五郎
梅里雪山 登山の失敗に思う	平井一正
書評 渡辺一枝著「チベットを馬で行く」	薬師義美
AACK 人物抄 高橋健治さん—その3—	斎藤清明
台湾玉山 (3952m)	新井 浩
追悼 多田政忠先生を偲んで	近藤良夫
短報 日本の3000メートル峰	酒井敏明

第5号 (1997年5月26日発行)

AACK の現状と将来を考える—一座談会の記録—	
出席者 新井 浩、伊藤宏範、遠藤克昭、斎藤惇生、酒井敏明、潮崎安弘、清水 浩、左右田健次、高村奉樹、寺本 巖、中島道郎、西山 孝、能田 成、平井一正、広瀬幸治、松井敦男、松原英夫、松本保博、森本陸世、横山宏太郎	
中国・太原での二年間	本仁久一郎
AACK 人物抄 高橋健治さん—その4—	斎藤清明
「京都大学学士山岳会」という名称について	平井一正